

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第864号 平成27年1月16日

評価経済（1）

昨年10月に発刊された「僕たちは就職しなくてもいいのかもしれない」という1冊は、働くという事に対するこれまでの発想の転換を我々に突き付けているといっても良く、非常に興味深いものがあります。

この本を書いたのは大阪芸術大学の客員教授をされている岡田斗司夫氏で、彼が提唱する「評価経済」という考え方については、賛否はともかく、専門家といわれる人の中に急速に関心が広まっているようです。

それでは一体、「評価経済」とはどのようなものなのでしょうか。

岡田氏は、「僕たちは就職しなくてもいいのかもしれない」の中で、次のように説明しています。

「農家と漁師さんはむかしからお米と魚を交換している。人が買って当然と思っているものが、第1次産業で働く人たちの間では、無料でやりとりされていたりする。このやりとりこそ、評価経済の基本」

「無料でやりとり」というと、大昔の物々交換のようですが、これが成り立っているのは、少なくとも、双方のモノに対する評価が釣り合っているからですが、今後は、お金を媒介にしてモノやサービスを交換したり手に入れたりしている貨幣経済社会から、評価を元にモノやサービスが交換される社会になっていくというのが、岡田氏の主張です。そうなれば、お金は主役の座から降りる事になります。

岡田氏は、非常に面白い事をいっています。

それは、欲しいものを手に入れる方法に関してですが、

- ・新品を定価で買う
- ・ネットで安く買う
- ・中古で手に入れる
- ・誰かからただで貰う

という方法を並べた時に、一見新品を定価で買う人がまともな人に見えるかも知れないが、それは全く逆で、むしろ、誰かから「ただ」で貰える方が価値があるというのです。

それは、お金さえあれば誰でも新品を定価で買う事が出来ますが、誰かから「ただ」で貰うというのは、「ただ」で貰えるだけ人間関係が存在しなければなりませんので、実は容易ではありません。つまり、逆説的ですが、「ただ」でくれる人がいないのでお金を出して買うしかないという事ですから、岡田氏は、「新品を定価で買

うという当たり前の方法の方が、負け組っぽく見えてこないか？」と述べています。

確かに、「ただ」でモノをやり取りするというのは、お互いに相手をそれに相応しい相手と評価している訳で、そういう人間関係が沢山ある人というのは、お金持ちとは別の意味で豊かさを享受しているといえそうです。岡田氏はそれを「周囲との関係性の豊かさ」と表現し、お金での取引はその場で終わるが、関係性のある取引はこれから先も育ち続けると述べています。同時に、お金で考えてしまう癖から抜け出せず、「お金を稼ぐためには就職しなければ」と自分を追いつめ、ますます自分を貧しくしてしまっている人は依然として多い、というのが氏の指摘です。

さて、今街を歩けばリクルースタイルの若者を沢山目にします。まだ、就職が決まっていない若者も少なくないのだと思います。

岡田氏は、「苦勞して入った大学での半分近くの期間を就活に悩み、せっかく就職したのに、わずか数年で辞めてしまう。なんという時間と労力、何より「気持ち」のムダなのでしょう？」と述べると共に、「就職を考えている若者の過半数が『なんで決まんないのかなあ…』と悩んでいて、決まっている人も『就職できた』と大喜びできず、『これでいいのかなあ…』と半信半疑でいる状態。こんなの異常です」と述べていますが、全くその通りだと私も思います。(塾頭：吉田 洋一)